

8章 総評：全国の状況を踏まえての考察

ベネッセ教育総合研究所 教育研究企画室長 小林一木

概要

- 「主体的・対話的で深い学び」が目指しているのは、「生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続ける」人材（＝アクティブラーナー）を育むこと。
- アクティブラーナーを育むために、学校や授業を「活動」「空間」「共同体」「人工物」の学習デザイン論の視点で総合的に捉えてみることも必要。
- 新型コロナウイルス感染症による休校措置により、ICT環境の格差がクローズアップされているが、これは「空間」と「人工物」の側面を捉えた議論。
- 本来は、授業内容や学習する場のデザインなど「活動」、「共同体」も総合的に捉える必要があり、オンライン授業やクラスルームでのやりとりなどICT環境整備のみで解決できない課題が発生している。
- 結果、学校間、教師間で学びの質に格差が生じており、学びの質を保証することが最低限必要。
- そのために、今回取り上げた「ICEモデル」など思考の枠組み（＝フレームワーク）は有効。
- 「ICEモデル」は、マニュアルではないため、目の前の生徒の状況に応じて柔軟に活用でき、「指導と評価の一体化」にもつながる。
- 特に、授業設計の骨格として、「問い」を位置づけている。授業をする単元やテーマ、学習目標に応じ、ICEモデルにてらして、どういう問いをどういう順番で並べると生徒が学習目標に到達するかの思考のプロセスをデザインするものとなっている。
- 教師は子どもたちのロールモデルであり、教師自身がアクティブラーナーであることが、子どもたちの学びを促進させる。
- 今回のコロナ禍は、学校の存在理由や価値、教師のあり方に対して、大きな問いを投げかけており、今まさに考え直す時期である。
- これらの問いにアクティブラーナーである先生方がつながって考え、試行錯誤を繰り返すことこそ「主体的・対話的で深い学び」ではないか。

「主体的・対話的で深い学び」で目指すものは？

学習指導要領が改訂されるここ数年、全国の小中学校、高校にうかがい授業を見学させていただくと、多くの先生が「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業を試行、実践されていることを実感します。また、先進的な実践事例が教育情報紙・誌やWEBサイト等で数多く報告されています。

2020（令和2）年度より小学校から学習指導要領が改訂され、今後、中学校、高校と進んでいきますが、こういった実践を見てみると、授業改善の流れがひろがることは、間違いないだろうと考えていました。その矢先、この原稿を執筆している2020年5月上旬の時点で、新型コロナウイルス感染症により全国的に休校措置がとられ、子どもたちは自宅学習となり、学校に通学できない状況が続いています。この状況の中、「子どもたちの学びを止めない！」という思いのもと、多くの学校、先生がICTなどのツールを活用され、様々な制限がある中、試行錯誤しながら授業を進められています。もちろん不幸な

出来事ではありますが、子どもたちを取り巻く環境の大きく、かつ速い変化により授業改善は一気に加速しています。現状はオンライン授業の工夫やICTの活用など手段がクローズアップされていますが、一方でそもそも『主体的・対話的で深い学び』を目指すものはなんだろうか？』ということ、ここで一度立ち返ることも必要ではないでしょうか。

「主体的・対話的で深い学び」によって、「生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続けるようにすること」（文部科学省「主体的・対話的で深い学びの実現（『アクティブ・ラーニング』の視点からの授業改善）について（イメージ）より）」、そういった人材（＝アクティブラーナー）を育てていくことが謳われています。

現在の世界はきわめて予想困難な状況に直面しています。これから世界を創っていく子どもたちは、この時代認識のもと、知識・技能をスクラップ&ビルドし、かつ、変化した状況に持っている知識・技能を関連させ、対応させなければならない。さらによりよい世界を築いていくために、人生100年時代と言われる中、能動的に学び続ける素養を学校教育で培うことが必要になっている、と説明されてきました。今回のコロナ禍は、これまで言われてきたことが現実であることを教えてくれたのではないのでしょうか。すでに自ら能動的に学ぶ力が大人も子どもも必要であることは、withコロナの時代を生きる我々にとって必須になっているのではないかと思います。

学校教育の「質保証」の必要性

様々な授業改善の実践が一気に進む中で、逆に顕在化してしまっているのが、教育格差の問題です。学習指導要領改訂前の先進的な実践もすべての地域、すべての学校で行われていたわけではありません。当然、差はあったわけですが、コロナ禍により、社会の環境が一気に変わっているため、その差がより大きくなっているように感じます。

現状は、ICT環境など学習環境の整備度合いによる取り組みの差がクローズアップされていますが、これは、学習環境デザイン論（「ワークショップデザイン論」山内、森、安斎 2013）から考えると、「空間（建築・家具レイアウトなど）」と「人工物（素材・道具の利用など）」に関する問題です。この問題は早急に解消される必要があるのは当然ですが、さらに、「活動（プログラム・授業デザインなど）」、「共同体（学習者の多様性など）」の視点が重要ではないかと思います。

子どもたちが「生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続ける」学習者に成長するために、学習の支援者としての教師は、どういう授業内容にするのか（活動）、多様性を確保するために学習の場をどういうデザインにするのか（共同体）ということを考え、その実現のためにどういう環境を準備（空間）し、どういうツールを使うのか（人工物）を総合的にデザインすることが求められています。

休校措置に対応して、まずはICTを活用し、これまでの授業を再現するということが必要でしたが、この経験を蓄積してきた先生や学校では、授業自体をオンラインで行うことを前提に設計し直し、より生徒がインタラクティブかつ能動的に学べる試行も見られるようになってきました。こういった授業と、大量のプリントを宿題として配布して自学自習させるのとは、学びの質が大きく変わることが容易に想像できます。

義務教育、中等教育、少なくとも国公立高校において学びの質に差がつくことは、何のために公立学校があるのかという存在意義に関わる問題ではないかと思います。まして、同じ学校内で先生によって、生徒の学びの質に差がついてしまうのは、先生を選択できない生徒にとって機会を奪われていると言われてもおかしくありません。学校として子どもたちの学びの質を保証することは、最低限必要なことではないでしょうか。

学びの質を保証するためにフレームワークが必要 — ICE モデルの活用

前置きが長くなりましたが、学校間、先生間で学びの質に差がついてしまうことは、子どもたち一人ひとり誰も取り残されることなく、「能動的な学習者」に成長していくための阻害要因だと思います。さらに、小学生から高校生の期間は、社会に出る準備期間であり、この期間での学びが人生を左右しかねない大切な期間であることを考えると、学びの「質」に格差がついてしまうことは子どもたちの将来的な「幸せ」に大きな影響を与えているといえるでしょう。

この学校教育の「質保証」を図る1つの方法として、フレームワークの活用が考えられます。今回、フレームワークの1つとして「ICEモデル」を取り上げました。もともとICEモデルはカナダの高等教育で評価のフレームとして開発、活用されているものです(参考『『主体的学び』につなげる評価方法と学習方法』Sue F. Oostaty Young, Robert J. Wilson. 2013)。

ICEモデルの良さは、「第2章 基本的な考え方」でふれられているように、「『物事を把握したり、思考したりする枠組み』なので、具体的な内容があるわけではない」という点です。生徒を一律に見て、同じように指導するマニュアルではありません。生徒一人ひとりの状況に合わせた最適な学びを提供するために、生徒を日々見ている先生方の創意工夫を生かすための「整理の枠組み」と言った方がよいかもしれません。やり方がきっちり決まったマニュアルではないため、実際に活用する環境に合わせた柔軟性があります。そのため日本の初等中等教育に取り入れられ、独自に進化している印象があります。今回の情報は実際にICEモデルを活用されている先生方の意図やノウハウをまとめたものです。

「第3章 理論編」では、ICEモデルとはどういうものかの解説とともに、すでに実践されている3名の先生方からICEモデルを授業設計に活用されている意図や活用方法の概要をまとめています。授業だけでなく、若手の先生からの相談に明示はしていなくてもその枠組みを使っているエピソードもあり、ICEモデルはある一定の枠組みがあるからこそ柔軟に活用できるのではないかと感じました。

「第4章 教材編」では、各先生が授業で実際に使った教材を挙げ、どういう指導をし、実際、生徒はどのような様子だったのか、また、課題も含めて使用場面を具体的にイメージしていただけるのではないかと思います。

ICEモデルの活用をイメージしていただいたうえで、「第5章 実践編」では、ICEモデルを活用した授業の内容をデザインシートにまとめていただくとともに、実際に各生徒がどこまで身につけているかを評価するための考査の問題例を掲載しました。授業デザインシートでは、ICEモデルに照らしてどういう問いを生徒に考えさせているか、さらに実際に、どう評価(アセスメント)するかのルーブリックをまとめていただきました。

「指導と評価の一体化」と言われて久しいですが、授業と評価問題をセットでデザインされ、知識・スキルの習得だけでなく、その活用についても一体で考えられていることがわかります。評価単独、ルーブリック単独で考えられるケースが多い印象の中、「指導と評価の一体化」のサポートツールとしてもICEモデルは有効に機能しています。ICEモデルを活用しようとする先生方の参考になるのではないかと思います。

「第6章 組織的な取り組み」では、学校として学びの質を保証するために、先生個々の取り組みではなく、学校全体で展開している事例をまとめました。学校を取り巻く環境や生徒の状況がそれぞれ違う群馬県立前橋高等学校、岡山県立林野高等学校、熊本県立第二高等学校の取り組みを「導入期(一部、導入前・導入時)」「展開期」「促進期」に分けて現在の状況だけでなく、どのようなプロセスで現在に至っているのかをまとめていますので、各期によってポイントがあることがわかるのではないかと思います。各先生方の取り組みも各学校の取り組みも現在進行中であり試行錯誤を重ねながら進められていますの

で、完成形ではありません。「第7章 成果と課題」で実際に取り組まれたことによって見えてきた課題をまとめています。先行事例から学ぶことでご自身の授業では、学校ではどういう課題が出てきそうか予見することができ、先に考えておいた方がよいが見えてくるのではないのでしょうか。

第9章として、ここまでに紹介した授業設計や授業デザインシートの詳細版を掲載していますので、「第4章 教材編」や「第5章 実践編」の内容をより詳しく知りたい先生は「資料編」をご確認ください。

教師からの問いの80%は「見せかけ」的な質問？

今回、先生方の授業設計や授業デザインシートを見て考えたのは、生徒を見取り、その場にフィットさせる即興性を伴った授業法は当然大切ですが、授業の中心は、やはり生徒にどういう思考をしてほしいかを具体的に「問い」としてデザインすることではないかということです。

ここで、アメリカの研究ではありますが、現状の授業について、見ていきたいと思います。様々な授業に関する研究をメタ分析した結果をまとめた「教育の効果 メタ分析による学力に影響を与える要因の効果の可視化」(John Hattie.2018)の中で、質問についての分析結果が掲載されています。

それによると、授業時間の35%~50%は教師から生徒への質問で、2番目に多く用いられる指導方略(ちなみに1番目は「先生が語ること」)です。質問すること、特に高次の質問は効果的な指導方略であり、生徒が学習目標に到達するには、深く思考することが必要になりますが、そのためには「問い」が重要という結果が出ています。これは多くの先生方も同意するところではないでしょうか。

では、その質問の内容を見てみると、60%は「事実の確認」の質問、20%は授業を進めるための「手順の確認」の質問。「事実の確認の質問」「手順の確認の質問」の内容は、「学習者から見れば教師はすでに答えを知っているような」内容で、結局、質問の多くは、情報を再生できるかを点検することにとどまっていると指摘されています。

質問の80%は質問の形をとってはいますが、本質的な質問ではありません。生徒が深く思考することを促進する「深く考えさせる」質問は20%ということです。生徒にとって、先生から発せられる質問は効果的な指導方略であるにもかかわらず、です。

ここで再度、「第5章 実践編」の先生方が作られた授業デザインシートを見ていただくとよいでしょう。生徒が学習目標に到達するために、「問いの構造化」の部分で、「導入展開の問い」「洞察を促す問い」「本質的な問い」にわけ、それぞれICEモデルのI(基礎知識)領域、C(つながり)領域、E(知の応用)領域に整理され、またどういう順番で発問するかも設計されています。教科や到達目標によって違いはありますが、C(つながり)領域を中心に、E(知の応用)領域の問いも組み込まれています。もちろんI(基礎知識)領域で、知識の確認も必要ですが、先ほどの研究結果では、80%がおおよそI(基礎知識)領域の問いと考えられるのとは大きく異なっています。学習目標を基に、ICEモデルで問いを作り、目標到達を促すためにその順番を組み立てられ、授業の骨格をつくられているのでしょうか。まさにフレームワークがあることにより先生方の思考が整理されているのではないのでしょうか。

さらに、より生徒の主体性を引き出すために、この中で作られているICEループリックを生徒に提示し、生徒どうしが相互評価(アセスメント)することにより、問いの意図を理解し、そのフレーム間をつなぐことで学びにストーリーが生まれる。こういったより深い思考を促すことにトライされている先生もいらっしゃいます。これをさらに進めるなら、ICEモデルに基づいて、生徒自身に問い自体を作らせたり、ICEループリックを作らせたりすることによって生徒は学習目標をより理解し、深い学びにつなげることができるのではないのでしょうか。これもフレームがあるからこそできるのではないかと思います。

ICEモデルのフレームで問いを構造化することで、授業で取り上げる単元や分野、テーマについて、先生方がどういう思考をたどって理解しているか、その思考プロセスを可視化しているとも言えます。ルーブリックを生徒に公開する取り組みは多くなっていますが、到達基準を見せるだけでなく、「問いの構造化」を見せることで、生徒がどういう思考の順番で考えればよいのか、どこで理解不足になっているのが明確になるのではないかと思います。そして、先にも述べたように生徒に問いを作らせ、どういう順番で学習目標に到達するかを考えさせたり、ICEモデルのフレームにそって記入させたりすることで、理解度を見るアセスメントにもなるのではないかと、さらに活用の可能性のひろがりを感じています。

この観点は、「第7章 成果と課題」の中で『「教師がデザイン」から「生徒がデザイン」へ』との課題が挙げられています。最終的には、ICEモデルを使って、子どもたちが自らの学びをデザインすることを目指されており、今後の取り組みが楽しみです。

子どもの成長に大きな影響を与える「教師」の役割は？

子どもたちにとって、未来を創り、その未来を生きるための基礎をつくり、成長する時期に最も濃密に接するのは、先生ではないでしょうか。自分の「幸せ」を発見し、つかみ取るのは、あくまでも子どもたち自身です。ただ、「幸せ」をつかみ取るために「生涯にわたって能動的に学び続ける」素養を培うのが学校教育であるならば、教員の影響はとても大きいものです。数か月後が予想できないwithコロナの時代をいやおうなしに生きることになる子どもたちにとって、数か月前までのbeforeコロナの時代以上に「生涯にわたって能動的に学び続ける」ことは不可欠であり、これまで以上に学校教育、そして教師の役割は重要であり責任も重いものになります。

今回、ご紹介したICEモデルの実践のポイントは、その活用方法や実践方法というノウハウだけではなく、学校の主語を「生徒」とし、将来、子どもたちが「何ができるようになっていなければならないか」、Goal-based（ゴールベース）で授業をデザインされ、その目標に対して、子どもたち一人ひとりの状況を見取り、個別最適な学びを提供しようと試行錯誤するマインドセットではないかと思います。

まさに、「第7章 成果と課題」に挙げられているように、実践する中で課題が見え、その課題解決のために、さらに試行錯誤を重ねる。時には失敗しながらもまた課題が出てくる、さらに試行錯誤を重ねる。何が正解かわからない、すでに正解はないかもしれないものを探究することが学びのプロセスであるなら、まさに未来を創る子どもたちの最も身近にいる大人である教師自身が学び続ける姿勢を子どもたちに見せていくことが、ロールモデルになり、子どもたちの学びになっているのではないのでしょうか。

コロナ禍により、多くの制約の中、子どもたちの「学びを止めない」ために日々悪戦苦闘されている先生が全国にたくさんいらっしゃいます。まさに主体的に行動され、試行錯誤の学びのプロセスを繰り返されていることと思います。今回まとめたICEモデルの実践報告が1つの素材となり、全国の先生方に対話が生まれ、学び続ける先生方がつながり、より深い学びにつながることを願っています。

むすびにかえて

非日常の中だからこそ、日ごろ気づかなかったことに気づきます。このところ高校生や大学生と話す機会が多いのですが（もちろんオンラインで）、大人よりもこの状況に対応しているように感じます。おそらく大人とオンラインで話す機会を持てる子どもは、休校措置によってできた時間を自分のやりたいことにどんどん使い、つながりをつくり、より学びをひろげているのではないかと感じます。とはい

え、自宅から一歩も出ずに閉じこもって孤立している子どもたちも多くいるものと思います。今後、学びの土台としてメンタルケアが課題になってくるでしょう。

つながりをひろげ探究し続ける子ども、孤立している子ども、双方ともに、いつも当たり前に通っていた学校、いつもなら…たまには休みたい、なんて思っていた学校。それが行けないことが日常になると、つながりをひろげている子どもでも「学校に行きたい」と言います。孤立している子どもはなおさらではないでしょうか。明らかに、学校の価値や意味が変化してきているのを感じます。これまでの日常はもう戻りません。「新しい日常」の中で、学校はどう変化していくのでしょうか？ 予測ではなく、どう変化させたいのか？ 学校での学びとはなんなのか？ 授業をどう変えたいのか？ そういった中で教師の価値や役割をどうしたいのか？まさにこれらの問いを主体的に考える時期を迎えているのではないのでしょうか。

ICE モデルだけではなく、目の前の生徒の学びを止めないために、日々試行錯誤をしていらっしゃる先生はまさにアクティブラーナーです。こういった先生方がつながり自身の取り組みを共有するだけでなく、with コロナ時代の学校、教師のあり方という本質的な問いを一緒に考え、さらに学校で試行錯誤を行い、その体験から考えたことを共有し、フィードバックしあうサイクルこそ「主体的・対話的で深い学び」ではないかと今回の授業での実践や先生方との議論から考えています。